



大阪公立大学共同出版会

NEWSLETTER

ニュースレター

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

No.43

特別号

目次

- 大阪公立大学共同出版会(OMUP) 設立20周年記念対談
荒川 哲男・八木 孝司 … 1
- 第16回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告 … 4
- 令和3年度 スタッフ一覧 … 4
- 慶祝、OMUP20周年！ 新たな革袋には新しい酒を！ 足立 泰二 … 5
- ニュースレターにみるOMUPの20年と思い出 小股 憲明 … 7
- 自署を語る(36) 少数教科書出版システムによる教科書の作製
八木 孝司 … 11
- 新刊書の紹介 … 12
- 大阪公立大学共同出版会事務局より／編集後記 … 12

大阪公立大学共同出版会(OMUP)設立20周年記念対談

大阪市立大学 学長 荒川 哲男

インタビュアー：OMUP 理事長 八木 孝司

対談日：2021年4月9日

本年、大阪公立大学共同出版会は、設立20周年を迎えました。これを機に大阪府立大学と大阪市立大学の学長にお話を伺いました。大阪府立大学辰巳砂弘学長の玉稿はニュースレター第41号に掲載させていただきました。この号では、大阪市立大学荒川哲男学長と弊社理事長との対談を掲載させていただきます。

八木理事長：OMUPは、2001年、当時大阪にあった5つの公立大学すなわち大阪市立大学、大阪府立大学、大阪女子大学、大阪府立看護大学、大阪府立看護短期大学の教員有志によって設立されました。これら5つの公立大学はこの間に統合され、来年1つの公立大学となってスタートします。この区切りのいい年に、大学出版会の役割や弊会に対する要望などについて荒川学長の率直なご意見、また新大学に対する抱負などをお聞かせいただければ幸いです。

<今年(年始)の格言について>

八木(以下職名略)：先生のHPを拝見いたしますと、以前、年始にその年の志を「今年の格言」として揮毫されていましたが、その後、学長にご就任され、大阪市立大学として最後となる今年はどのような言葉だったのでしょうか。

荒川学長：今春、卒業生を送り出す際、新型コロナウイルス感染拡大により、卒業式も謝恩会もできない状態でした。それでナノグラツーリズムという彼らの思い出に残るものを企画し、大変好評だったのですが、その時に、研究科長全員が卒業生に向けて自分の想いを一言書こうということになりました。そこで学長である私は、格言ではありませんが「挑戦」

という言葉を書きました。コロナと向き合い、色々と学んだことを土台にして、今年は「挑戦でいこう」という意気込みでいます。

八木：なるほど。学長としてより良き新大学を作るための「挑戦」、そして新型コロナウイルスに対する「挑戦」ということですね。



<学術出版の意義について>

八木：大阪市立大学の多くの教員がOMUPから書籍を出版してくださっています。荒川先生の学術出版に関するご実績はいかがでしょうか。

荒川(以下職名略)：私の場合は原著論文が多く、国際誌に300報以上の論文を書いています。学術的な本は、英文で6冊ほど出版しています。一般向けには「あなたの主治医が名医に変わる本」を最近上梓しました。そのほかFacebookを絵日記のようにまとめた本や、学会発表で海外に出張した際の四方山話のブログをまとめた本があります(次頁写真上両端)。ブログは、書くときにイメージを決めたほうがよいということで、「フーテンの寅さん」のイメージで作っています(笑)。

八木：私は荒川学長のブログ「どくとるてつお放浪記」を読ませていただいて、抱腹絶倒でした。先生のお人柄がよく表れていて、大変楽しく読ませていただきました。ISBNをつけて出版されたらよいのではないかと思いますのですが、いかがでしょうか。

荒川：販売する目的ではありませんので、ISBNは付けていなかったのですが、書籍として出版する以上、ISBNを付け

ていくのも良いかもしれません。Facebookを本にしている書籍については、最後に全部をまとめて1冊の書籍にしようと思っているのですよ。

八木：では、その際には是非ともOMUPから出版してくださいませ

ようお願いします（笑）。荒川学長は、学術出版の意義をどのようにお考えですか。今は電子書籍がたくさん出てきておりますが、私としては紙媒体が大切と思っています。学長はどのようにお考えでしょうか。

荒川：私も人間としてはアナログ人間です。実際、小説を読むときは、デジタルは嫌いで、本をめくりながら読むほうが好きです。電子書籍で読んでいますと、読んだ内容を再度、確認しようとしても、なかなかそこには戻れないので困ります。また、斜め読みができない。メモとかもおそらく取れないのではないかと思います。そのようなことから、論文など研究論文を引用する場合は、電子ジャーナルでもよいかもしれませんが、じっくり読むものはやはり紙のほうがよいと考えています。

八木：そうですね。私が思うに、古事記、日本書紀、源氏物語などの古典が残っているのは、紙媒体だったからで、電子書籍をPDFで出せば、いつまで残っているのか。何百年と経てば、なくなってしまうのではないかと思います。やはり物として残しておくことが大切ではないかと考えています。

荒川：電子媒体は実感が伴わないですね。古文書とかは図書館にも残っているのですが、実際にみると感動するものです。

八木：確かにそのとおりですね。

<今までの大阪市立大学、これからの新大学>

八木：今年で大阪市立大学、大阪府立大学が終わりますが、感想あるいは新大学に対する抱負とかありましたら、お聞かせいただけませんか。

荒川：どちらも伝統ある大学です。私は大阪市立大学の医学部だったので、杉本キャンパスでは、最初の2年間、教養を学びましたが、その後はほとんど縁がありませんでした。学園紛争で1年間は授業もない状態で、クラブ活動でグラウンドを使用するためにこちらに来ていたという感じでした。

学長になってから大阪市立大学の歴史を知り、五代友厚氏が本学の最初のルーツを創ったことを知りました。私は、もともと侍の理念に憧れています（七人の侍）。弱い人の為に戦うスタイル、その中で個性のある人々が集まってチームを



作り戦う。そのようなチームを作りたいと思ってずっとやってきていますので、それが、五代友厚氏が唱えている4つの理念の1つにもなっている「他利」と共鳴するものがあります。五代友厚氏は薩摩藩の侍だったのですが、そういう理念を持ちながら明治維新で大阪経済の近代化を図ったのです。「他利」の精神で人脈ができ、多くの支援のもとで偉業を成し遂げることができたのです。この「他利」の精神を学生にも伝えていきたいと思っています。

また、本学からはサントリーの創始者鳥井信治郎氏や、iPS細胞でノーベル賞を受賞された山中伸弥先生などのように、自由な進取の気性を持つ実業家や学者を輩出しています。その伝統と歴史につながっていく新大学になっていけばよいと思っています。

八木：ありがとうございます。それぞれの長い歴史がありますから、それがうまく融合して良い大学になっていけたらいいですね。

荒川：はい。新大学に向けては、今までに紆余曲折があって、最初の橋下知事の時代は、二重行政の解消ということで、その意図はお金を節約するために合併するみたいなイメージでした。そのため、機運も盛り上がりせず反対も多かったですね。しかし途中から政治的な反発もあって、良い大学を作るためにという方針が変わり、そのことで、お互いに良い大学を目指すという風潮が高まってきました。

辻洋先生が大阪府立大学の学長の頃、定例的に知事・市長と両学長で数か月に1回程度、懇談をしていましたが、両学長ともに頑と譲らなかったのが、メインキャンパスは都会の中心に置かないといけないということでした。当初、天王寺動物園の場所はどうかという話もしていましたが、市長が動物園は天王寺にあるからこそいいのであるとあって、実現しませんでした。2番目の候補地として森之宮はどうですかと尋ねてみました。その頃、行政は民間のほうにリサーチをかけていました。しかし、森之宮の使える敷地は駅から離れた飛び地でもあったので、条件が悪いことからうまく進んでいなかったのです。そこに新大学のキャンパスが来るとなれば、周りも引っ張られて活性化するのではないかとということで、行政が動き出しました。そういう経緯があるのですよ。

八木：では、大学のほうから先に森之宮を提案したということですか。

荒川：そうですね。ノミネーション提案とでもいえるのでしょうか。雑談で話をしたことがきっかけであったのではと思っています。

森之宮という地は、もともと戦後間もない頃に大阪市立大学が総合大学になるときに、候補地になっていたらしいのです。大阪市が、債権を発行して森之宮に大学を作ろうと動いていたのですが、それを進駐軍にストップされ、扇町に作られたという経緯があるらしいです。今回、森之宮に返り咲いたというか、因縁のある地でもあります。

森之宮は、新しいモデル地域としてのタウン作り、スマートシティともいわれているまちづくりが計画されています。

その中心になるのが新大学のアカデミアであってほしい。隔壁された要塞みたいな大学ではなく、壁を取っ払って街と融合するようなキャンパスがあって、大学の中にも市民が自由に出入りをし、全体がキャンパスタウンみたいなイメージのまちづくりになってほしいと思っています。



そこは通称、森之宮地区と言われていますが、正式には、大阪城東部地区という名称の地域です。公立大学法人大阪の「新大学基本構想」に基づく都心キャンパスの立地や「大阪スマートシティ戦略」の取組みを踏まえ、大阪城東部地区全体のまちづくりのコンセプトや土地利用の具体化を図るために、府市・民間事業者等・有識経験者で組織する「大阪城東部地区まちづくり検討会」というのがあり、メンバーとして西澤理事長が代表で、両学長はオブザーバーとして発言をさせてもらいました。その時、まちづくりに関しては、STADというキーワード、つまり「サイエンス」、「テクノロジー」、「アート」、「デザイン」の4要素の頭文字を連ねた造語ですが、それをまちづくり・ひとづくりのコンセプトにするべきと提案し、取り入れていただきました。ちなみに「STAD」はオランダ語で「街」を意味します。

昨今、自然科学が至上主義的になって、アルゴリズムですべてを解決できるような話になってきていますが、人間はそんな単純なものではなく、そこに人文系のものをとりいれないと、冷たいタウンになってしまう恐れがあります。そういった観念から「アート」と「デザイン」が重要な要素で、4要素が揃った人材育成をしていかないといけないし、街も4つの良さが融合した造りになってほしいと思っています。

その隣に下町である中浜地区というDeepな街があって、私はそこで生まれ育ったのですが、我々アナログ人間はデジタルなスマートシティってあんまり住みたいと思わないじゃないですか。だから、そこで疲れたら、中浜地区にきてもらって、スローシティを味わう。スマートシティとスローシティが隣同士にあるような大都市は、他に例がないと思うのですよ。そういうふうな地域にすれば大阪の活性化にもつながるのではないかと考えています。

キャンパスがあることにより、様々な民間が集まってきて活性化していくと、大きなショッピングモールができて、地域の商店街がすたれていく場合のように、スマートシティがあることにより、周りが沈んでいく可能性があります。この

ようなことは決して起こしてはいけないと考えています。

八木：今、学長のお話を伺って、アメリカのボストンをイメージしたのですが、どこからが大学で、どこからが街かわからないような大学ですね。

荒川：そうですね。

八木：日本での初めての試みかもしれませんね

荒川：そうですね。芸術家も白い壁があれば、アートを書きたくなるらしいので、そのような場があり、誰もが自由に描いてもらえるようなアートフルな街がよいかと思っています。

<大阪公立大学共同出版会の役割とは>

八木：最後になるのですが、京都大学や大阪大学など大きな大学には、大学出版会というのがあります。NPOとして大阪では弊会が初めての出版会なのですが、学長がお考えになる大学出版会の役割をお聞かせいただければうれしいのです。

荒川：学術的な論文は専門誌がありますが、そういうものではなく公立大学として、地域に大学をより理解していただくための楽しいメディアとして役割を果たしていただければうれしく思います。大学内にある広報にも同様なことを求めています。市民に理解していただけないことは悔しいことなので、たとえば公開講座であれば一般受けするようなタイトルをつけたりすることは大事かと思っています。市民に寄りそった出版会として発信していてもらえたらうれしいです。

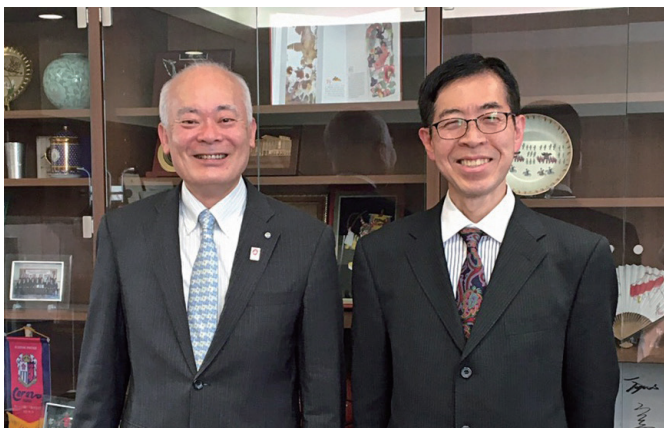
八木：学術的なことを、一般の方にもわかりやすい言葉で発信していくということですね。

荒川：そういうことです。

八木：ありがとうございます。弊会も今年で20周年を迎えました。今後、ますます発展していくよう精進して参りますので、どうぞよろしくお願いいたします。

今日は、貴重なお話をどうもありがとうございました。（この他にも、楽しい話がいろいろとありましたが、紙面の都合で割愛させていただきました。ご了承ください。）

（文責：八木孝司）



大阪市立大学 荒川哲男学長（左）
大阪公立大学共同出版会 八木孝司理事長（右）

第16回NPO法人大阪公立大学共同出版会総会報告

令和3年6月19日（土）午後1時半から2時半まで大阪府立大学B14号棟2階自己研修室において、第16回NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）の総会が開催された。総会成立の確認後、八木孝司理事長を議長に選出し、さらに大塚耕司常務理事と山東功常務理事を議事録署名人に指名して、議事に入った。第1号議案「令和2年度事業報告」では、図書の刊行にあたり、著者とのトラブルを避けるため、著者と面談を行い、「大阪公立大学共同出版会（OMUP）から著書を刊行されるかたへ」の文面に署名をいただいていること、より見やすいホームページの作成を業者に委託したこと、コロナ禍の影響もあり、出版が6件しかなく、財政的に苦境に陥ったが、経済産業省から給付金、大阪府から支援金を受けられたことなどが報告され、満場一致で承認された。第2号議案「令和2年度事業決算」は、表に示す通りである。監事より「適法かつ正確である」と署名捺印をいただいていることが報告され、満場一致で承認された。第3号議案「役員等の選任」では、伊藤康人氏、平井規央氏、前川寛和氏、吉田敦彦氏を新たに理事職に選任し、その任期を令和4年（2022）8月7日までとすることが提案され、満場一致で承認された。第4号議案「業務契約」では、杉本公認会計士事務所との顧問契約、事務局業務に関して児玉倫子氏、湯井順子氏との雇用契約を継続することが提案され、満場一致で承認された。第5号議案「令和3年度事業計画」では、受託出版事業、出版物の受託販売事業、OMUPブックフェアの開催、出版目録の作成と配布、ニュースレターの発行（年間2回）、「読ン得本々」の発行、ホームページおよびフェイスブックの運営、OMUPサロンの開催など、おおむね前年度と同様の事業を展開することが提案され、満場一致で承認された。第6号議案「令和3年度事業予算」では、表に示すような予算が提案され、満場一致で承認された。（文責：中村治）

令和3年度予算書

（単位：円）

科 目	R2 決算額	R3 予算額	差 異
事業収入			
書籍売上	5,026,126	6,500,000	1,473,874
出版収入	1,883,005	6,620,000	4,736,995
著者負担 大学負担・ 出版助成等	1,641,638	2,630,000	988,362
寄付金収入	0	0	0
入会金収入	0	50,000	50,000
その他の収入			
受取利息	48	50	2
雑収入	2,573,993	0	-2,573,991
当期収入合計	11,124,810	15,800,050	4,675,240
売上原価			
期首商品棚卸	1,433,607	1,466,851	33,244
製作費	2,421,540	6,000,000	3,578,460
運送・発送費	182,930	270,000	87,070
編集デザイン料	426,366	1,000,000	573,634
期末商品棚卸	-1,466,851	-1,400,000	66,851
管理費			
雑給	3,688,488	4,100,000	411,512
法定福利費	508,838	500,000	-8,838
業務委託費	463,637	463,637	0
旅費交通費	292,469	300,000	7,531
通信費	91,190	110,000	18,810
会議費	8,438	20,000	11,562
地代家賃	72,850	75,000	2,150
保険料	126,000	126,000	0
水道光熱費	24,547	30,000	5,453
著者精算	2,011,239	2,000,000	-11,239
消耗品費	1,210	10,000	8,790
租税公課	1,050	1,050	0
事務用品費	592,831	240,000	-352,831
広告宣伝	488,209	150,000	-338,209
支払手数料	276,692	270,000	-6,692
法人税等	70,000	70,000	0
当期支出合計	11,715,280	15,802,538	4,087,258
当期収支差額	-590,470	-2,488	587,982
前期繰越収支差額	6,298,997	5,708,527	-590,470
次期繰越収支差額	5,708,527	5,706,039	-2,488

令和3年度 スタッフ一覧

1. 理事

八木 孝司	理事長	難波 利幸	理事
上田 純一	常務理事（総括）	平澤 栄次	理事
中村 治	常務理事（財務総括）	伊藤 康人	理事
山東 功	常務理事（編集・企画）	平井 規央	理事
大塚 耕司	常務理事（編集・企画）	前川 寛和	理事
金井 一弘	常務理事（編集）	吉田 敦彦	理事
内藤 裕義	常務理事	足立 泰二	理事（顧問）
中井 孝章	常務理事	小股 憲明	理事（顧問）
		三田 朝義	理事（顧問）

2. 監事

上野山 達哉
生田 英輔

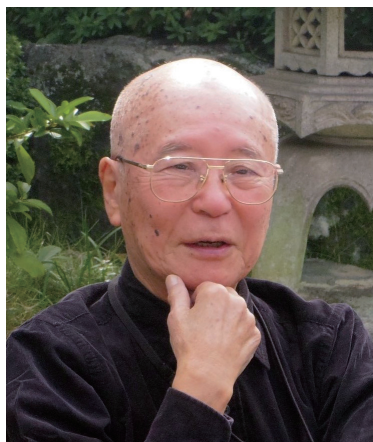
3. 事務

児玉 倫子
湯井 順子

4. 編集

川上 直子
中村 奈々

OMUP顧問・理事（前理事長） 足立 泰二



はじめに

本年、大阪公立大学共同出版会（以下OMUPと略称）が創立20周年を迎えられたこと、そして新たな公立大学法人大阪の関係者の方々のご支援に感謝申し上げる次第である。そこで、OMUP創立に関わり、いま顧問・理事としてOMUPに携わっている者として、OMUPの更なる発展を祈念する気持ちで、本稿を草する次第である。なお、NPO法人の大学出版会としてのメッセージは、OMUP発足以来継続発行されているNEWSLETTERに度々著しているの、WEBサイトをご覧いただくとその時々思いをつぶさに読み取っていただけるはずである。

OMUP発足の経緯、初期の意気込みとパフォーマンス

ことは前世紀末、といえ大袈裟だが、1999年の秋、大阪南部に位置する大阪府立3大学4ユニット（大阪女子大学、大阪府立大学、大阪府立看護大学および同医療技術短期大学部）と大阪市立大学の教員に、大学出版会の設立について広く呼び掛け、アンケートを取った結果、多くの賛同を得た。賛同者の絶大な協力・激励を受けて、準備の1年間はアツという間に過ぎ、めでたく任意団体「大阪公立大学共同出版会」設立総会を挙行できた。その日が2001年2月17日である。アンケートに積極的賛意を表された全員が評議員として設立に参画するという熱の入れようだったことを記憶している。

初代役員は次の通り。榎原孝雄（府大、当時農学生命科学部長、以下敬称略）、常務理事（庶務）を足立泰二（府大）、同（財務）小股憲明（女子大）、理事に平澤栄次、湯浅勲、田畑理一（市大3名）、石井実、太田宏、堂丸隆祥、駿河輝和（府大4名）、三田朝義（女子大）、北村肇（看護大）、監事には圓藤吟史（市大）、高辻功一（看護大）。評議員は上述したように発起人全員（86名）が当たった。

いっぽう、当座の運営資金は会員からの寄付金（一口1万円～10口、合計280万円）で運用し、事務局は大阪女子大

学院卒業生で組織されたダブル・ワークス（難波美都里代表以下3名）に委託し、編集は立ち上げたばかりの自費出版に特化した星湖舎社長の金井一弘氏に編集長として尽力いただいた。

創立の理念としては下記事項が確認され、文字通り、2001年、今ミレニアム（千年紀）とともに幸先良いスタートを切った。

1. 出版会は組織としての構成大学当局に從属する形はとらない。
2. 著者自らが出版資金調達に努力することを旨とするものの、OMUPは出版助成金申請等、外部資金調達に協力する。
3. 自然、人文、社会科学全方位の分野の学術成果を大学の社会へのエクステンション機能として位置付ける。
4. 出版を通して教育・研究に利する方策を著者と共に探索する。
5. 各役員は出版業務の報酬を原則受け取らない。

初期の実績としては、英文学術モノグラフ書籍、続いて学術書・啓発本、さらには分野別執筆者によるユニヴァーシリーズの刊行など、年間4、5冊のペースながら出版は順調に推移した。会員および関係者にはOMUP情報誌NEWSLETTERを年2回刊行し、新刊の著者を囲むOMUPサロンをもつこととした。「良質の書物をどこよりも安く、迅速に！」をモットーに進んだのだった。その間、例えばフランス語の学術書（フランス・クリンクシク社と提携）では、著者自らがご尽力によるフランス留学中の指導教授の語学チェック、書籍校正作業等の出版のプロセスは、OMUPが著者の希望をかなえ支える形となり、その後もこの形が継続されてきている。

当時のOMUPおよび全国の大学出版会の機運を列記してみると、

1. OMUP創立時から会員間の意思疎通が緊密で、若年層の非会員からも頻繁な出版問合わせがあった。
2. 全国大学出版協会（当時24大学）および関西地区大学出版会との交流は積極的で、OMUP総会における先発大学出版会との交流を通じ各種問題点を教示頂いた。三重大学出版会、京都大学学術出版会、大阪大学出版会等の状況はOMUP会員を大いに刺激したのだった。
3. 当時は大学独立法人化の波の中で、各大学の所属教員の「知的創造活動」として、学術書・啓発本の位置付けが強化された時期でもあった
4. 「OMUP会員が新入生にすすめる本」（後に、大阪府立大学図書館・OMUP・府大生協の共同企画になる「読ン得本々」として今も継続）の発行は、当時の会員の学生たち、若手研究者たちに与えた刺激は大きかった。

5. 大阪府立大学社会福祉学部および大阪市立大学文学部の博士号取得者の書籍刊行が旺盛になり、自費出版のほか、学部長裁量経費や後援会からの出版支援を可能にした。
6. 2005年から大阪女子大学と府立看護大学2ユニットの大阪府立大学への統合により、当時の大阪女子大学学長や多くの教授メンバーのOMUPへの積極的参画を得た。

特定非営利活動法人（NPO）承認後の活動展開と今日までの推移

当初は文字通りよちよち歩きのOMUPが、大阪府生活文化部からNPO法人として登録認可を受けるよう勧められ、2005年5月NPO法人設立の承認を得て、大学出版会の社会への貢献を一段と高めることとなった。一方、大学出版協会が全国的に存在し、構成24大学出版会は、国立か私立大学の個々の大学名を冠した出版会または出版社で、組織形態も大学とは独立した株式会社、中間法人あるいは大学生協が後ろ盾になっているものであった。彼らから、OMUPは「複数の公立大学が共同で学術出版を可能にしたのだろう」と誤解されたこともあった。しかし、実際は、府立大学と市立大学が等距離的に、しかも両大学から財政上運営上の直接援助を得ることなく、個別参加の個人またはグループがいわば切磋琢磨して、出版活動の活発化に寄与したのだった。

NPO法人化に呼応した出版活動活性化の端的な例は、OMUPブックレットの創刊で、No.1の刊行は2005年5月である。学生への講義や地域公開講座向きの副読本として、あるいは科学研究グループのまとめや調査研究成果の地域還元として、廉価で質的にも時宜に合ったシリーズ本としての刊行実績を挙げ続けている。重版、再版されるものも多い。

さらに、OMUPが誇りにすべきは、外国語書籍出版である。出版第1号は植物バイオテクノロジーに関する英文モノグラフであるが、その後、上述のフランス語の「近代小説の祖、バルザック作品評論」の両国共同刊行、英語の「結び目の数学理論とその教育法」はドイツ・シュプリンガー社との共同出版で、その後も、英語の「理論経済本」、フランス語の「日仏言語の表現比較」（複数大学共同出版社との共同（校閲・販売を含む）など、日本国内の大学出版の追随を許していない。

OMUPの創立5周年とNPO法人化を記念して、関西圏大学出版会ブックフェアを主宰した。2006年11月4日～12月31日、ジュンク堂書店大阪本店3階特設コーナーで参加大学出版書籍展示・販売ならびに講演会（特設会場）を呼びかけ、大阪大学出版会、関西大学出版会、関西学院大学出版会、大阪経済法科大学出版会、富山大学出版会、三重大学出版会の参加を得た。また、後年には大学出版部協会の勧誘に応じて、「日・中・韓三国セミナー」や定例総会・懇親会にオブザーバー参加をしたが、加入するまでに至っていない。

OMUP法人化時期として明記すべきは、その前年に初代理事長から三田朝義理事長への交代、事務局の移転（府立の3大学4ユニットの統合により、大阪女子大学内から再度府

立大学内へ）、さらには事務業務委託のダブル・ワークスからサイエンスアシスト（代表 渡邊喜美子氏）への変更である。

一方、統合大阪府立大学の公（校）費出版支援助成も年々発展し、新刊書籍数も、NPO法人化以降、着実に増加し、年間15冊前後に至っている。若い研究者やドクター取得者に研究成果を出版するよう呼びかけたOMUPの努力は大きい。同時に、後継者育成に励まれてきたことにより、OMUPから出版が継続されているのは感謝に堪えない。その上でさらに私が新大学の教授に望むことは、教授が「学生や若い研究者が本を読まなくなった」という前に、自らがもっと本を著していただきたい。それが若い人の読書意欲をそそることになるのは必定である。ジュンク堂書店難波店長福嶋聡氏が著書「紙の本は、滅びない」（ポプラ新書）の中でOMUP活動を支持し、大いに主張しておられる「紙媒体は文化を造る」を強調したい。

これからのOMUPに期待する

話変わって、かつて西ドイツの大統領だったヴァイツゼッカーが、1985年、ドイツ敗戦40年に当たって連邦議会で行った演説はつとに著名である。その全文の訳書「荒れ野の40年」（岩波ブックレットNo.55）は、「一国の運命」を語っている。それに比し、我々の「よちよち歩きの20年」は、何ともしつぽけな「文化活動」を語っているに過ぎない。しかし、「一寸の虫にも、五分の魂あり」の諺があるように、どうかいつまでもOMUPが発展し続けてくれるよう願わずにはられない。

そこで、創設20周年のOMUPの新たな門出と大阪公立大学の新たな門出が期せずして重なるこの時期に、学知の中核であるべき図書館とOMUPとが共催して、「新生大阪公立大学の学知の発信と保全－出版とアーカイヴ」と題するシンポジウムを開催してはどうだろうか。そこで大阪公立大学にとっての大学出版会の必要性・意義・役割や位置づけなどについて、大いに議論していただきたいと思う。

私はOMUPがOxfordやCambridge大学出版社のような一人前の学術出版社に、次の10年、20年先の目標に向かって展開されるよう心から願うものである。ちなみに、ドイツの出版社は首都でもないStuttgartに集中し、大学の一角に陣取っている。文化の地方分散、文化力向上に役立つものと考えるが、いかがであろうか。

おわりに

「三つ子の魂、百まで」という我が国の諺がある。齢80、傘寿を迎える我が人生を振り返り、悔いはない。いや、それどころか「人生をひとの三倍も楽しんだ輩^{やから}」として、存分の知的好奇心を充足させていただいた。全ての「師、知友および後進」に感謝している。とりわけ、OMUPと共に歩んだこの20年は私にとっては有意義な歳月であった。OMUPの新たな展開を願いつつ、この小文を閉じたい。

ニュースレターに見るOMUPの20年と思い出

OMUP顧問・理事 小股 憲明



はじめに

中村治常務理事から20周年記念の原稿執筆を依頼され、はて何を書いたらいいものか、最近とみに脳力・記憶力の減退著しいと自覚する身としては、記憶のみに頼ったのでは誤りだらけの老害の垂れ流しになると悩んでいたところ、幸いにも足立泰二前理事長の20周年寄稿文の草稿を読ませて頂く機会があった。その中に「出版会としてのメッセージは、OMUP発足以来継続発行されているNEWSLETTERに度々投稿していますので、WEBサイトをご覧いただくとその時々の推移をつぶさに読み取って頂ける」と述べておられるのに触発されて、その創刊号から最新の42号まで読み返してみた。するとまことに、ニュースレターはOMUPの歴史の凝縮体である。

OMUPの理念や志については、足立前理事長の今回の寄稿文やニュースレターへの度重なる寄稿文に明らかであるのでそちらに譲ることとし、ここではニュースレターの記事に拠りながら、20年間の歴史の中からさらなる10年、20年に向けて参考になると思われる項目を抽出して紹介して、責めをふさぎたい。なお本文中に（＊号）とある注記は、関連記事の掲載号を示している。

Ⅰ ニュースレターにみるOMUPの20年

1 ニュースレターについて

まずは、ニュースレターの書誌的な事項について記しておきたい。

ニュースレターの創刊号は2000年3月で、版型は今日まで続くA4版、体裁は縦書き5段組（9号まで）、基本モノクロであるが、OMUPのロゴマークだけがカラーとなって目立っている。1頁だけのきわめて簡素なもので、「OMUP ニュースレター」の題字は新聞の題字と同じように紙面の右肩に縦に配置されていて、全体に四角張った堅苦しい印象である。

2004年8月の第10号から紙面の刷新が行われ、カラフルな紙面になるとともに、今日まで続く横書き2段組の体裁となり、題字「OMUPニュースレター」も表紙上部に紙面幅で横に配置されるようになった。題字はその後、13号から「ニュースレター」となり、23号から「NEWSLETTER」となって今日に至っている（本稿では統一して「ニュースレター」と表記する）。

「編集」は1～12号が「W. Works」、13号が「サイエンスアシスト」であり、14号以降「編集」の記載はなくなって、代わりに「編集後記」にその号の編集者のイニシャルが記名されるようになったが、16号までは「サイエンスアシスト」の児玉倫子、渡邊喜美子が交代で編集している。サイエンスアシストとの契約終了によって、17号～25号については基本的に足立泰二の編集となり、小股憲明と金井一弘も各1回担当している。26号から最新の42号については、編集後記の記名は原則として実名表記となり、一貫して児玉倫子が担当している。

発行頻度については、創刊の2001年と翌2002年が年3回、2006年が年1回であるほかは、最新の42号に至るまで原則として年2回の発行となっている。頁数は、1～7号が1頁、8～9号が2頁であったが、紙面刷新の10号が6頁となって以降、42号までに4頁9回、6頁21回、8頁1回なので、原則6頁、記事の多少によって4頁になったり8頁になったりするといった具合である。

2 事務局所在地について

OMUP事務局所在地は、最初大阪府立大学農学生命科学研究棟の足立泰二研究室に置かれたが、その停年にともない、2005年4月から大阪女子大学文化棟2Fに移転した。しかし府立系大学の統合によって女子大大仙学舎が閉鎖されることになって、2007年4月から再び大阪府立大学内に戻り、A14棟221号室を事務局とした。その後2018年に同大学内B14棟2Fに移って、現在に至っている。

なお、2001年7月27日、第1回評議員会を大阪市立大学学術情報総合センター会議室で開催しているように、初期には常務理事会などの会議も、女子大・府大だけでなく、なるべく市大でも開催するように心がけていた。府立系大学と市立大学のバランスをとることが、運営上の重要事項として意識されていたのであった。このことは今日また新たに心すべきことになっているように思われる。

3 事務局体制について

事務局業務は最初、大阪女子大卒業生が起業したW. Works（ダブルワークス、難波美都里代表）に委託して、ニュースレターの編集、2001年HPの開設など、発足当初のOMUPをよく支えて頂いた。その後2006年から事務局業務は有限会社サイエンスアシスト（渡邊喜美子代表）に交代したが、同

社員としてOMUPに専ら張り付いてくださったのが兄玉倫子さんと、2007年度限りで同社との委託契約が終了した後もOMUPに残って、今日に至るまで局長として事務を切り盛りし、2013年以降はニュースレターの編集も担当していただいている。今やOMUPの最古参となられた。

なおW. Worksは、私が女子大教職員に呼びかけて設立した「大阪女子大学SOHOサポートファンド」の出資先第1号（残念ながら出資先2号が現れないうちに府大との統合で女子大も同ファンドもなくなってしまった）として、2001年に有限会社となった（4号）。私はその後、南大阪地域大学コンソーシアムの立ち上げに関わり、2002年度から2年間その初代事務局長を務めたが、その事務局業務を有限会社W. Worksに引き受けていただき、そこでも代表の難波美都里さんに大いに助けられた。

編集長を引き受けていただいた金井一弘（星湖社主）さんは、ISBNナンバーの何たるか初めとして（1号）、本作りのイロハをいろいろと教えてくださった。その支えがあつてはじめて、OMUPの本作りの第一歩を踏み出すことができたのであった。

4 OMUPロゴマークについて

ロゴマークはW. Worksの金山久美さんのデザインである。発足時の大阪府立3大学4ユニットと大阪市立大学と併せて4大学5ユニットを5つの公立大学と見なし、そこからの参加者が力を合わせて出版会を発展させることを願って5つの輪が重なり合うデザインとなっている（1号）。今日の理事の皆さまでも、ロゴマークのこのような由来をご存じないかたもいらっしゃるかもしれない。

OMUPサロン一覧

回	講演者（著者）（講演時の肩書・所属等）	講演著書名（発行年）／講演名	会場	開催日
第1回	フランツ・フォマン（カリフォルニア大学アーヴィン校教授）	How to Overcome Breeding Barriers by Means of Plant Biotechnology?（2001）	レストラン御陵	2001.7.18
第2回	中川昌一（大阪府立大学名誉教授）	ブドウを知らばワインが見える（2002）	河内ワイン館	2002.6.24
第3回	堀内昭作、馬場栄一郎、児玉洋、清田信、林英雄（発話順）（大阪府立大学農学部）	農学生命科学へのいざない（ユニヴァシリーズ①）（2002）	焼き肉ろっそ	2002.10.18
第4回	文字信貴（大阪府立大学農学生命科学研究科教授）	植物と微気象（2003）	イタリアレストラン Café Rosso	2003.3.28
第5回	阿部敦（神戸国際大学経済学部専任講師）	社会保障政策従属型ボランティア政策（2003）	大阪府立大学学術交流会館	2003.5.24
第6回	地域環境を考える会10名（大阪府立大学農学部地域環境学科）	農学から地域環境を考える（2003）	大阪府立大学学術交流会館	2003.9.26
第7回	村田京子（大阪女子大学人文社会学部助教授）	Les Metamorphoses du pacte diabolique dans l'œuvre de Balzac（バルザックの作品における「悪魔との契約」の変貌）（2003）	フレンチレストラン ドゥースドゥース	2003.12.12
第8回	相川信之、吉川周作、矢尾昭、益田晴恵、増本真二他（大阪府立大学理学部地球学教室）	地球学へのいざない（ユニヴァシリーズ②）（2003）	大阪府立大学学術総合情報センター1Fウィステリア	2004.3.27
第9回	足立泰二（大阪府立大学農学生命科学研究科教授）	植物色素研究法（2004）	大阪府立大学学術交流会館	2004.6.5
第10回	泉千勢（大阪府立大学人間社会学部福祉学部教授） 笹山忠則（大阪府立看護大学医療技術短期大学部教授）	ヨーロッパの保育と保育者養成（2004） 地域情報政策と公立諸大学（2003）	ガスビル食堂	2004.9.17
第11回	北原博（大阪府立大学博士後期課程修了）	ゲーテの秘密結社―啓蒙と秘教の世紀を読む―（2005）	松下IMPビル26Fスカイレストラン ASAHI	2005.3.25
第12回	小原憲明（大阪府立大学人間社会学部教授）	近代日本の国民像と天皇像（2005）	大阪府立大学学術交流会館	2005.5.21
第13回	森田尚文（大阪府立大学大学院生命環境科学研究所教授）、前田智子（兵庫教育大学生活・健康系教育講座）、阿部敦（神戸女子大学文学部）、渡邊かおり（金沢大学大学院社会環境科学研究科）、中井孝章（大阪府立大学大学院生活科学研究科）	OMUPブックレットNo.1「食文化、東と西」（2005） OMUPブックレットNo.2「『少子高齢社会』の描かれ方」（2005） OMUPブックレットNo.3「食育が子どもを教える―知識から知恵へ―」（2005）	和食厨房はんなり	2005.12.23
第14回	沼田英治（大阪府立大学理学研究科教授）、三井秀也（岡山大学医歯薬学総合研究科助手）	マゴットセラピー ウジを使った創傷治療（2006）	大阪市立大学医学研究科棟	2007.2.23
第15回	竹安数博（大阪府立大学経済学研究科教授）、樋口友紀（同研究科特別研究員）	Time Series Analysis and Its Applications（2007）	大阪府立大学生協食堂	2007.6.2
第16回	村田右富実（大阪府立大学人間社会学部准教授） 渡辺幸博（元関西大学教授）	南大阪の万葉学（OMUPブックレットNo.13）（2007） かつて私は軍国少女であつた 渡辺孝子遺稿集（2007）	大阪府立大学学術交流会館	2008.6.22
第17回	記事欠落につき、内容不明			
第18回	鄭 楊（ハルビン大学政法学院准教授（大阪市立大学大学院博士後期課程修了））	孤独な中国の小皇帝―都市家族の育兒環境と社会化―（2008）※博士論文	大阪府立大学学術総合情報センター1Fウィステリア	2009.1.23
第19回	中村治（大阪府立大学人間社会学部教授） 山東功（大阪府立大学人間社会学部准教授）	ラテン詩人水野有庸の軌跡（2009） 「大学」を学ぶ―大阪府立大学史への誘い―（OMUPブックレット別2）（2009）	大阪府立大学生協喫茶室セリーゼ	2009.6.6
第20回	松村篤（大阪府立大学大学院文学研究科博士後期課程修了） 白田由樹（大阪府立大学特任講師）	中世ドイツ語宮廷文学と日本の王朝文学（OMUPブックレットNo.28）（2009） サヴァンナル メディアと虚構のミューズ（2009）	大阪府立大学学術総合情報センター1Fウィステリア	2010.2.5
第21回	八木孝司（大阪府立大学産学官連携機構教授）	Harmony Nature and Science―The Nakamozu Garden Campus―なかもずキャンパスの四季（2010）	大阪府立大学A14棟2F会議室	2010.8.7
第22回※	八木孝司、児玉靖司（大阪府立大学産学官連携機構教授）	みんなのくらしと放射線（2008）	ジュンク堂書店 難波店	2011.5.21
第23回※	大西文秀（竹中工務店プロジェクト開発推進本部（大阪府立大学博士）） 対話者 難波利幸（大阪府立大学理学部教授）	環境容量からみた日本の未来可能性（2011）	ジュンク堂書店 難波店	2011.10.8
第24回※	永井伸和（『本の学校』運営委員（今井書店グループ会長）） 濱森太郎（三重大学出版会編集長）	大阪公立大学共同出版会創立10周年、NPO法人化5周年記念 関西圏大学出版会ブックフェア&講演会「本の周辺」 大阪公立大学共同出版会創立10周年、NPO法人化5周年記念 関西圏大学出版会ブックフェア&講演会「大学出版の魅力」	ジュンク堂書店 難波店	2012.2.5
第25回※	金井一弘（OMUP編集長）×福嶋聡（ジュンク堂書店難波店店長） 岩村等（大阪経済法科大学法学部教授）	大阪公立大学共同出版会創立10周年、NPO法人化5周年記念 関西圏大学出版会ブックフェア&講演会「学術出版物 作る側の苦労と売れる側のいいぶん」 大阪公立大学共同出版会創立10周年、NPO法人化5周年記念 関西圏大学出版会ブックフェア&講演会「環山樓市民塾をめぐって大学と地域連携と出版」	ジュンク堂書店 難波店	2012.2.19
第26回※	船越克己（大阪府立大学名誉教授）	ニーダーラインの光景（2012）	ジュンク堂書店 難波店	2012.10.28
第27回※	和田安弘（大阪府立大学人間社会学部教授） 対話者 小股憲明（大阪府立大学名誉教授）	紛争と共感のリアリティ（2012）	ジュンク堂書店 難波店	2013.1.20
第28回	谷直樹（大阪府立大学生活科学部教授）	いま起きている長屋―大阪市大モデルの構築（2013）	豊崎長屋	2013.11.10
第29回	長尾謙吉（大阪府立大学経済学研究科教授）	大都市圏の地域産業政策―転換期の大阪と「連環」の着想―（OMUPブックレットNo.46）（2014）	大阪府立大学A14棟2F会議室	2014.6.28
第30回※	本山幸彦（京都大学名誉教授）	横井小橘の学問と思想（2014）	ジュンク堂書店 難波店	2014.9.15
第31回	中村治（大阪府立大学人間社会学部教授）	小学校卒業写真に見られる服装・風俗の変化―京都の場合―	大阪府立大学A14棟2F会議室	2015.6.13
第32回※	北島順子（大手前短期大学准教授）、吉岡敦子（私設教科書総合研究所主宰）	教科書が語る戦争（2015）	ジュンク堂書店 難波店	2015.11.26
第33回※	山口義久（大阪府立大学名誉教授）、堀川宏（京都大学）	大阪公立大学共同出版会創立15周年、NPO法人化10周年記念 古代ギリシャ語語彙集改定版 基本語から歴史／哲学／文学／新約聖書まで（2016）	ジュンク堂書店 難波店	2016.9.24
第34回※	能田成（熊本大学・京都産業大学名誉教授） 対話者 乙藤洋一郎（神戸大学名誉教授）	デージーワールドと地球システム―The Earth Systemの抄訳と編著者のノートから―（2017）	ジュンク堂書店 難波店	2017.4.28
第35回※	小林樺（大阪府立大学名誉教授） 対話者 大黒俊二（大阪府立大学名誉教授）	ロマンスという言語―フランス語は、スペイン語は、イタリア語は、いかに生まれたか（2019）	ジュンク堂書店 難波店	2019.5.28
第36回※	伊藤康人（大阪府立大学大学院理学系研究科教授）	活断層と私たちのくらし―その調べ方とつきあい方―（2018）	まちライブラリー@大阪府立大学	2019.8.23
第37回※	中村治（大阪府立大学人間社会学部システム科学研究科教授）	小学校卒業写真で見える 服装・風俗の変化	まちライブラリー@大阪府立大学	2020.2.12

※ JUNKU難波トーク・セッション と共催 ※※ まちライブラリー@大阪府立大学 アカデミックカフェ と共催

5「OMUPサロン」について

記念すべき第1回のOMUPサロンは、OMUPの出版第1号である『How to Overcome Breeding Barriers by Means of Plant Biotechnology?』の足立先生との共著者であるカリフォルニア大学アーヴィン校フランツ・フォフマン教授（植物学）を迎えて、2001年7月18日、仁徳陵前レストラン「御陵Goryo」を会場にして開催された（3号）。それ以降直近の第37回まで、OMUPの歩みとともに回を重ねて来ている。

サロンは足立常務理事の発意によって始まったものであり、著者とOMUPメンバーとの貴重な意見交換の場となっている。サロン後の懇親会を含めて、執筆の裏話や研究の苦労談などが語られ、生の中でこそ生まれる対話を通じての交流機会となり、新たな出版への導火線にもなっている。各回の詳細は表に示すとおりであるが、こうして一覧表にしてみると、当出版会の優れた文化的伝統としてのサロンの蓄積を実感することができ、今後もぜひ継承されることを願っている。

シリーズ記事「著者は語る」／「自著を語る」一覧

ニュースレター掲載号	タイトル	語り手	書名（出版社・発行年）
1 第2号	著者は語る「新刊に寄す一著者の一人として」	足立泰二	How to Overcome Breeding Barriers by Means of Plant Biotechnology? (OMUP・2001)
2 第9号	著者は語る「Les Metamorphoses du pacte diabolique dans l'œuvre de Balzac」	村田京子	Les Metamorphoses du pacte diabolique dans l'œuvre de Balzac (バルザックの作品における「悪魔との契約」の変貌) (OMUP・2003)
3 第11号	著者は語る「ヨーロッパの保育と保育者養成」	泉千勢	ヨーロッパの保育と保育者養成 (OMUP・2004)
4 第11号	著者は語る「地域情報政策と公立諸大学」	笹山忠則	地域情報政策と公立諸大学 (OMUP・2003)
5 第12号	著者は語る「ゲーテの秘密結社」	北原博	ゲーテの秘密結社 (OMUP・2005)
6 第12号	著者は語る「近代日本の国民像と天皇像」	小股憲明	近代日本の国民像と天皇像 (OMUP・2005)
7 第20号	私の共編著『生物間ネットワークを紐とく』を語る	難波利幸	生物間ネットワークを紐とく（シリーズ群集生態学3）（京都大学学術出版会・2009）
8 第21号	自著を語る（2）「自己愛スペクトルー理論・実証・臨床実践」	三船直子	自己愛スペクトルー理論・実証・臨床実践 (OMUP・2010)
9 第22号	自著を語る（3）「近代日本の国民像と天皇像」『明治期における不敬事件の研究』	小股憲明	近代日本の国民像と天皇像 (OMUP・2005) 明治期における不敬事件の研究（思文閣出版・2010）
10 第23号	自著を語る（4）「文物の儀ここに備われり 日本文明の源流を探る」の執筆動機	児玉典弥 大西文秀	文物の儀ここに備われり 日本文明の源流を探る（星湖社・2010） 環境容量からみた日本の未来可能性 一低炭素・低リスク社会への47都道府県3D-GIS MAP― (OMUP・2011)
11 第24号	自著を語る（5）「足跡―小股千佐／平林豊子の思い出と仕事」	小股憲明・小股小枝	足跡―小股千佐／平林豊子の思い出と仕事 (OMUP・2011)
12 第25号	自著を語る（6）「旅のガイドブックとしての『ニーダラインの光景』」	船越克己	ニーダラインの光景 (OMUP・2012)
13 第26号	自著を語る（7）「永遠の課題『リアリティの共有』に小さな灯をともし ―『紛争と共感のリアリティ』の語るもの」	和田安弘	紛争と共感のリアリティ (OMUP・2012)
14 第27号	自著を語る（8）「テレビの未来と可能性 ―関西からの発言―」	辻一郎	テレビの未来と可能性 ―関西からの発言― (OMUP・2013)
15 第28号	自著を語る（9）「デイスコースにおける「らしさ」の表象」	神田靖子・高木佐知子	デイスコースにおける「らしさ」の表象 (OMUP・2013)
16 第28号	自著を語る（10）「乳幼児をもつ母親のウェルビーイング」	川村千恵子	乳幼児をもつ母親のウェルビーイング (OMUP・2013)
17 第29号	自著を語る（11）「わたしが地域誌を作る理由」	中村治	洛北一乗寺 (OMUP・2014) 洛北静原 (OMUP・2014) あこのころの阿倍野 (OMUP・2014)
18 第30号	自著を語る（12）「実験教育の理想と現実」	水野寿朗	生物学実験への招待 (OMUP・2014)
19 第30号	自著を語る（13）「熱統計力学」	石井廣湖	熱統計力学 (OMUP・2014)
20 第30号	自著を語る（14）「英語の冠詞と<数>の仕組みがわかる指導 ―入門期に導入する認知文法の視点―」	岸本映子	英語の冠詞と<数>の仕組みがわかる指導 ―入門期に導入する認知文法の視点― (OMUP・2014)
21 第31号	自著を語る（15）「中小企業を百年企業にする社長の道しるべ」	忠岡博	中小企業を百年企業にする社長の道しるべ (OMUP・2015)
22 第32号	自著を語る（16）「10 ans d'échanges, et moi, et moi, et moi !」	MF Pungier・浅井美智子・猪俣紀子	un abécédaire francophile, 26 mots à voir, à lire, à rêver (OMUP・2013) on dit/ on fait ... j'ai dit, j'ai fait ! (OMUP・2014)
23 第32号	自著を語る（17）「民間放送のかがやいていたころ ゼロからの歴史51人の証言」	辻一郎	10 ans d'échanges, et moi, et moi ! 10 ans d'échanges, et toi ? et toi ? et toi ? (OMUP・2015) 民間放送のかがやいていたころ ゼロからの歴史51人の証言 (OMUP・2015)
24 第33号	自著を語る（18）「チョウの斑紋形成の生物学」	八木孝司	チョウの斑紋形成の生物学 (OMUP・2015)
25 第34号	自著を語る（19）「古代ギリシャ言語彙集改定版 基本から歴史／哲学／文学／新約聖書まで」	斎藤憲	古代ギリシャ言語彙集改定版 基本から歴史／哲学／文学／新約聖書まで (OMUP・2016)
26 第34号	自著を語る（20）「未来へ手渡すHOUSING POLICY 大版 住宅・まちづくり政策史」	北山啓三	未来へ手渡すHOUSING POLICY 大版 住宅・まちづくり政策史 (OMUP・2016)
27 第35号	自著を語る（21）「獣医学の狩人たち 20世紀の獣医偉人列伝」	大竹修	獣医学の狩人たち 20世紀の獣医偉人列伝 (OMUP・2017)
28 第35号	自著を語る（22）「デージーワールドと地球システム―The Earth Sysemの抄訳と編著者のノートから―」	能田成	デージーワールドと地球システム―The Earth Sysemの抄訳と編著者のノートから― (OMUP・2017)
29 第36号	自著を語る（23）「ニュータウンを次世代につなぐ ほっとかない郊外」	小池志保子	ほっとかない郊外 ―ニュータウンを次世代につなぐ― (OMUP・2017)
30 第36号	自著を語る（24）「生物環境物理学とはじめ」	高見晋一	生物環境物理学とはじめ (OMUP・2017)
31 第37号	自著を語る（25）「活断層と私たちの暮らし―その調べ方とつきあい方―」	伊藤康人	活断層と私たちの暮らし―その調べ方とつきあい方― (OMUP・2018)
32 第37号	自著を語る（26）「国家支配と民衆の力 ―エチオピアにおける国家・NGO・草の根社会―」	宮脇幸生	国家支配と民衆の力 ―エチオピアにおける国家・NGO・草の根社会― (OMUP・2018)
33 第38号	自著を語る（27）「洛北 上高野 山端」	中村治	洛北 上高野 山端 (OMUP・2018)
34 第38号	自著を語る（28）「写真集 京都小塩山のギフチョウ」	八木孝司	京都小塩山のギフチョウ (OMUP・2019)
35 第39号	自著を語る（29）「地域変容に対応した避難行動要支援者のための地区共助計画」	生田英輔	地域変容に対応した避難行動要支援者のための地区共助計画 ―課題と展望 (OMUP・2019)
36 第40号	自著を語る（30）「日本における生殖医療の最適化」	浅井美智子	日本における生殖医療の最適化 (OMUP・2019)
37 第41号	自著を語る（31）「しなやかにしたたかにシステム思考、大学の誇りと課題を全員広報」	辻洋	しなやかにしたたかにシステム思考 (OMUP・2019) 大学の誇りと課題を全員広報 (OMUP・2019)
38 第41号	自著を語る（32）「獣医学の狩人たち2 20世紀の獣医偉人列伝」	大竹修	獣医学の狩人たち2 20世紀の獣医偉人列伝 (OMUP・2020)
39 第41号	自著を語る（33）「諸宗教の世界における―世界宗教 キリスト教という現象」	花岡永子・吉水淳子	諸宗教の世界における―世界宗教 キリスト教という現象 (OMUP・2019)
40 第42号	自著を語る（34）「まちの健康回復に芝生の力を活かす グラスパーキングの科学」	伊藤幹二・伊藤操子	まちの健康回復に芝生の力を活かす グラスパーキングの科学 (OMUP・2020)
41 第42号	自著を語る（35）「若狭街道と鞍馬」	中村治	若狭街道と鞍馬 (OMUP・2020)
43 第43号	自著を語る（36）「少数教科書出版システムによる教科書の作製」	八木孝司	チョウから学ぶ遺伝学 (OMUP・2021)

6「著者は語る」／「自著を語る」シリーズについて

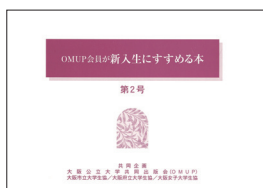
足立常務理事の発意によって始まったニュースレター上の連載企画である。前述のサロンが、その場で共有され記憶されるがその会話の内容は記録されないのに対して、このシリーズは、著者自らが執筆の意図や内容の肝、読者に伝えたいことなどを簡潔に述べるものであり、それらを活字にして記録し、広く読者に伝えるという意味で貴重である。各回の詳細は表で承知されたいが、「著者は語る」がニュースレター1号から12号までに6回、しばらくの中断を経て、「自著を語る」が同20号から42号まで35回、今日まで通算して41回の長期シリーズとして定着しており、その間に登場した錚々たる語り手は延べ48人、語られた自著は48点という蓄積を残している。

このシリーズもまたOMUPの誇るべき文化的伝統として、末永く継承されることを願っているが、やがて30周年を迎える頃には、シリーズ記事「自著を語る」を当出版会の貴重な財産として一冊にまとめ広く関係者に配布することがあるかもしれないと想像するのは楽しい。

7「OMUP会員が新入生にすすめる本」から「読ン得本々」へ

市大・府大・女子大生協とOMUPとの共同企画で、2003年「OMUP会員が新入生にすすめる本」（パンフレット）を初めて発行した。その目的は学生への図書の普及にあって、夏休み前には府大生協でこれに採録された本をすべて取り揃えたブックフェアを開催した（8号）。その後このパンフレットは2004年「OMUP会員が新入生にすすめる本」第4号までは毎年ニュースレターに写真付きの発行記事が掲載されている。2009年のニュースレター18号に「OMUP会員が大阪市立大学と大阪府立大学の新生と在校生にすすめる本」9号への原稿募集記事があり、実際に刊行されたものの紹介記事はないが、刊行されたものと思われる。

その後2010年の中断を経て、翌2011年からは、府大学術情報センター・府大生協との共同企画・製作として再出発し、府大図書館委員の諸先生方が執筆することとなり、タイトルも『大阪府立大学図書館委員会からのおすすめ2011年版「読ン得本々 新入生に勧める100冊の本より」』と改まった。新学期から府大図書館入り口に推薦図書を陳列して学生に勧めるほか、府大生協では推薦図書フェアが開催された（13号）。これ以降も、同様の共同企画、執筆陣で、2021年版まで継続して発行されており、新入生、在学生に向けた格好の読書案内となって重宝されている。



8 受賞の出版物

OMUPの出版物のうち、関係機関や学会などの表彰を受けた書籍は表にある8点である。受賞作のみが貴重というわけではなく、すべての出版物がその存在価値を持つことはいうまでもないが、各種関係先から高く評価されたこれら受賞作を「自費出版の」OMUPこそが世に送り出すことができたということを誇りにして良いと思う。残念ながら、優れた著作であっても一般の商業出版社では引き受けるところがない、というのが現状なのである。

ニュースレターには、以上の他にも多彩な記事が満載であるが、ここでは以上に止めたい。

II 個人的思い出

1 足立泰二先生とのご縁と、それを繋いだ本山幸彦先生

いつのことであったか、大阪女子大学の私の研究室を足立先生が訪問され、「府立大学農学部で足立です。本山先生のご紹介でお訪ねしました。つきましては、大学出版会を設立したいと思っており、ご協力いただけませんか」とのお話であった。本山先生とは、私が学部、大学院時代を通じて指導して頂いた本山幸彦先生（京都大学名誉教授）で、京大定年後に移られた関西大学を70歳で停年退職された後、ご夫婦で宮崎市に移住され、同地で宮崎大学に勤務しておられた足立先生と知り合わせ、親交を深められていたのであった。

その時伺った出版事業についての足立先生の真摯な情熱に触発され、また大いに賛同して、「私にできるご協力はさせていただきます」とお返事した。これが足立先生とともに私がOMUPと関わることになるきっかけであったが、私はそれ以来ずっと足立先生の補佐役をもって任じてきた。

本山先生（日本教育史・思想史専攻）は当会から、2012年『吉田松陰の政治思想』（ブックレットNo.35＝宮崎自然塾シリーズ1）を刊行され、2014年卒寿の年には『横井小楠の学問と思想』を刊行され、かつ第30回OMUPサロンの話者として宮崎から遠路お越しいただいた（30号）。今年97歳になられたが、ご夫妻で今も宮崎にお住まいで、私もたまにお訪ねするけれども、宮崎自然塾などで同地滞在が多い足立先生が折に触れて訪問され、ご夫妻の様子などを電話で聞かせいただけるのをあり難く思っている。

2 NPO法人認可申請の時の失敗談

私がOMUPに積極的に関わったのは最初の10年ほどであったが、任意団体としての発足時の諸規則の起草や、NPO法人化に当たっての設立趣意書、定款、事業計画など10種類ほどの制定などは中心になって担当したので、今でも私のPCにはそのときに作成した書類のフォルダが残っている。今回ニュースレターを読み返す中で、NPO法人化に向けて足立先生とご一緒に府庁府民活動推進課と事前相談を繰り返した末、最終の申請書類を持参したところ、それでも「書類不備があったため、府民活動推進課の向かい側にある大学課の部屋に飛び込んで…パソコンを使わせて貰って不備を修正し、やっと受理してもらうことができた」（13号）との、私自身が書いた報告記事の一節を発見した。すっかり忘れていたが、そんなこともあったか、いかにも抜け作の自分らしい、と苦笑するしかない。

受賞図書一覧

	著 書（発行年）	編 者 ・ 著 者	受 賞（受賞年）
1	環境容量からみた日本の未来可能性（2011）	大西文秀	環境情報科学センター賞特別賞（2011）
2	足跡 ―小股千佐／平林豊子の思い出と仕事（2011）	小股憲明・小股小枝	第17回日本自費出版文化賞個人誌部門賞（2014）
3	不動産価格バブルは回避できる ―不動産価格形成の本質を踏まえて―（2013）	建部好治	日本土地環境学会学術賞（2014）
4	いきている長屋 大阪市大モデルの構築（2013）	谷直樹・竹原義二	日本建築学会著作賞（2018）
5	生物学実験への招待（2014）	大阪市立大学理学部生物学科	大阪市立大学優秀テキスト賞（2014）
6	未来へ手渡すHOUSING POLICY 一大阪 住宅・まちづくり政策史―（2016）	北山啓三	日本都市学会賞（奥井記念賞）（2017）
7	ほっとかない郊外 ―ニュータウンを次世代につなぐ―（2017）	泉北ほっとかない郊外編集委員会	第32回地方出版文化功労賞特別賞（2019）
8	日本林業再生のための社会経済的条件の分析とモデル化（2019）	小堂朋美	日本環境共生学会学会賞（著述賞）（2019） 日本土地環境学会（奨励賞）（2020）

3 私がOMUPから出した本

私は、OMUPから4冊の著書ないし編書を出版した。2005年『近代日本の国民像と天皇像』は、私にとって初めての単著であり、1975年から2001年にかけての4半世紀間に発表した諸論文を一書に纏めたものであった。

2006年『南大阪地域大学コンソーシアムの挑戦』は、同コンソーシアムの設立に参画した経験をもとに、その設立経緯や初期の活動内容と特色を紹介したものである。

2011年『足跡 小股千佐／平林豊子の思い出と仕事』は夭逝した長女千佐（ペンネーム平林豊子、享年34歳）の追悼のために妻と共に編んだのであったが、ほとんど無名の個人追悼本の出版をお許しいただいた当時の常務理事会の皆さまに、厚く感謝している。この本はのちに第17回日本自費出版文化賞個人誌部門賞を受賞した。

2014年の府女専資料刊行会編『大阪府女子専門学校十年史草稿 見学旅行資料・戦時期学校日誌』は、大阪女子大の前身であった1924（大正13）年創立の府女専草創期10年間の歴史を纏めた手書き草稿を復刻したものである。旧女子大教員津川克治氏の寄付金を編集出版の原資としながら、歴史を閉じた大阪女子大の墓碑銘を刻するような思いで、旧大阪女子大教員であった山中浩さんと私が中心になって編集した。

この4冊はいずれも、私が常務理事の1人としてOMUPに関わったことから当会からの出版が実現したものであり、それぞれに思い出深い本となっている。

おわりに

学位取得者や若手研究者にとっては、その著書を公刊することは研究者としての評価を得、然るべきポストを得るための極めて重要なファクターとなっている。しかし一般の商業

出版社は、「採算に合わない」若手（無名）の出版を引き受けない。そのような現状にあって、当会はその発足の初期から、市大、府大での学位論文を多く公刊して若手研究者が世の中に羽ばたいていくお手伝いをしてきた。また府立大学では、当会から出版する若手研究者への助成などを実施してきた経緯がある。これからの新生大阪公立大学においても、若手の出版ニーズをさまざまに支援していくことは、その重要な責務の一つであろうと思われるし、学内に存在する出版会としてそのお手伝いをすることも、当会の重要な責務の一つであろう。

ちなみにニュースレターには、大阪女子大丸山高司学長「OMUPのさらなる発展を」（11号）、大阪市大西澤良記学長「新春インタビュー」（24号）、大阪府大奥野武俊学長「大阪公立大学共同出版会への期待」（28号）、大阪府大辻洋学長「出版とメディア」（31号）、大阪府大辰巳砂昌弘学長「無機材料と出版」（41号）と、各学長の寄稿やインタビュー記事があり、大阪府大辻洋学長は退任後に『しなやかにしたたかにシステム思考』、『大学の誇りと課題を全員広報』の2著を本会から刊行されている（41号）。私には、これらの事実はOMUPと各大学とのこれまで培ってきた信頼関係の反映であり、かつこれからのよりいっそう緊密な関係に向けての希望であるように思われる。

上に例示した若手のニーズだけではなく、学内には実にさまざまな出版ニーズがある。奇しくも当会20周年と大阪公立大学の新たな船出が重なることとなったが、両者がこれまでの信頼関係をさらに発展させつつ、ともに新たな希望の一步を踏み出され、学内の多様な出版ニーズに応える態勢を構築されることを切に希って、またOMUPの運営をいま担っているすべての皆さまへの謝意を伝えて、本稿を終えたい。

自著を語る（36） 少部数教科書出版システムによる教科書の作製



チョウから学ぶ遺伝学

八木 孝司 著

A5判、並製本、124頁
定価1,100円（本体1,000円＋税）
ISBN978-4-909933-24-9 C3045
2021年4月12日発行

OMUPは、授業で使用する教科書に限定した少部数出版を廉価で提供するシステムを作成しました。本の作製プロセスを統一・簡素化することにより、入稿から製本までの時間を短縮します。印刷には、高速インクジェットデジタル印刷機（TASKalfaPro15000c）を使用し、オフセット印刷と変わ

らない高品質な書籍を作製します。このシステムで出版が可能な教科書の頁数は80頁～150頁、部数は50部～250部の範囲で、学生の人数に合わせて印刷部数を無駄なく設定できます。また、PDCAに対応して毎年教科書を改訂することも可能です。費用は大学からの校費でまかなえる設定になっています（次頁表）。教科書には、ISBNコードが付与されるため、一般書籍と同様に、書店、大学生協、オンライン書店でも販売され、国会図書館にも納品されます。また、生協の電子教科書システムにも対応可能です。

私はこのシステムの最初の利用者として、生命環境科学域理学類生物科学課程3年生対象の自分の授業「遺伝学」の教科書を作製しました。大阪府立大学の2020年の授業は基本的にオンラインとなり、私は、オンデマンド授業で使用する動画の説明をワードファイルに残していました。その文章を書きことばに改変して本としました。そのため、本書は15回の授業に対応して15章のトピックスと「まえがき」「あとがき」から成っています。内容の特徴は、チョウの斑紋を遺伝の例

として多くあげていることで、本のタイトルは「チョウから学ぶ遺伝学」としました。しかし、チョウだけではすべての遺伝現象を説明することは困難なので、ヒト、他の動物、植物の例もあげています。第10章では、私が前任の大学で研究テーマとしていたヒトの遺伝病「色素性乾皮症」をとりあげています。この病気は、第1章から9章までの基礎遺伝学を総合することによって理解できます。このように、本書は他の遺伝学の教科書とは異なるオリジナリティーの高い教科書になったと私は思っています。理系の教科書は多数の図や写真が必要になり、本書の作製過程において作図にもっとも時間がかかりました。自分で作成が困難な図や写真は、他の本やウェブサイトから転載しましたが、ほとんどの著作権者から迅速に許可を得ることができました。

「遺伝学」の受講生は毎年最大でも50名なので、私は本書を60部作製しました。今年度の授業から改善点を洗い出し、来年度は改訂版を作製するつもりです。授業をもたれている先生がたは、ぜひOMUPの少数教科書出版システムをご活用ください。

〈参考〉料金表

本文（頁）	製作部数（部）	出版費用 税込（円）
80	50	140,250
100	50	155,650
100	100	174,460
120	200	236,610
120	250	255,090
150	100	231,440
150	200	277,860
150	250	299,970

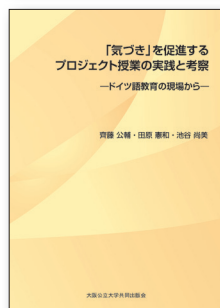
新刊書の紹介



イノベーションへの道

ロバート・G・フランク 著、酒井俊彦 訳
大阪府立大学高度人材育成センター 編

978-4-909933-21-8 C3037
A5判、上製本、190頁、1,650円
2021年2月22日発行



「気づき」を促進する プロジェクト授業の実践と考察 —ドイツ語教育の現場から—

齊藤公輔・田原憲和・池谷尚美 編著

978-4-909933-22-5 C3037
A5判、並製本、88頁、880円
2021年3月16日発行



社会福祉法人はどこに向かうのか

関川芳孝 編著

978-4-909933-23-2 C3036
A5判、フランス製本、178頁、1,760円
2021年3月31日発行



チョウから学ぶ遺伝学

八木孝司 著

978-4-909933-24-9 C3045
A5判、並製本、124頁、1,100円
2021年4月12日発行

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加によって成り立っているNPO法人です。本会は、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社が採算上刊行を引き受けないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、次のような事業を行っています。

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

参加を希望される方は、下記事務局へお問い合わせください。
〒599-8531 大阪府堺市中央区学園町1-1

大阪府立大学中百舌鳥キャンパス内
NPO法人大阪公立大学共同出版会（OMUP）事務局

電話：072-251-6533 ファクシミリ：072-254-9539

e-mail：omup@hs.osakafu-u.ac.jp

U R L：http://www.omup.jp/

入会金：一口一万円（終身会費）

振込先：三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

OMUPが今年で20周年を迎え、今号は特別号です。20年の歴史とともに出版本は、200冊を超えました。最近、新型コロナウイルス変異株が都市圏のみならず全国的にほぼ全ての地域で新規感染者数の増加傾向が続いています。このような状況下で授業を行うためには、教員はさまざまな対応が求められております。そこで、OMUPでは、少しでも授業の利便性を図るため、この春から少数教科書出版システムを導入しました。OMUPは大阪府立大学の中百舌鳥キャンパス構内に事務局がありますので、出版をお考えの方は気軽に立ち寄りください。（文責：湯井順子）